

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ラボデミSTEAM		
○保護者評価実施期間	R8年3月1日		R8年3月20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	7 (回答者数)	5
○従業者評価実施期間	R8年3月1日		R8年3月20日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4 (回答者数)	4
○事業者向け自己評価表作成日	R8年3月20日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	活動においての目的(例:製作・遊びなど)、発達段階、ニーズに合わせて部屋をパーティションで構造化したり、部屋や時間を区切ることで、利用者の方がどこで何をやれば良いのかを明確にしている。	活動においての目的(例:季節の製作・遊びなど)、発達段階、ニーズに合わせて部屋をパーティションで構造化したり、部屋や時間を区切ることで、利用者の方がどこで何をやれば良いのかを明確にしている。 また、利用者の方の状況に応じて母子分離・母子通所を実施している。	入園、入学前など、利用されるシーズンに合わせて、療育プログラムを変更、検討を繰り返し、本人、保護者のニーズの取りこぼしがないようにしていきたい。 現時点では、はじまりの会で季節の歌を準備し、ペーパークラフトで楽しめるようにしている。より季節を感じられる内容を取り入れていきたい。
2	媒体(LINE WORKS)を用いることで、リアルタイムで当日勤務外の職員も遡って、共有事項を確認することができる。また、これらを実施することで職員間の連絡・報告・相談の管理能力の向上につながる。	共有事項はすぐに連絡し、現場にいる職員・そうでない職員でもすぐに確認が取れるようにしている。保護者へ伝えなければならぬこと・子どものことで共有したいこと広く取り扱っている。	前後関係が読み取れかつ端的に伝えることで、より共有が濃密になる。
3	個別療育終了後、直接フィードバックの時間を設けている。保護者代理の付き添いの場合や時間の都合上、難しい場合のみ、保護者の方に同意を得たうえで活動管理記録(HUG)やLINEなどを通して写真等を活用し可視化できるかたちで共有している。	日常生活での利用者の方の様子、療育中に「できたこと」「できるようにしたいこと」の共有を、保護者の方へ伝え、次回の療育へとつなぐことができるようにしている。 その場で相談があれば適宜対応している。	預かりベースの児童発達支援ではなく、希望するニーズと事業所の目的が合うかたちでの運営を行っていきたい。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	療育を行う職員を、担当制としているため、体調不良等により、変わりができない状況ができる場合がある。 また、一人ひとりに丁寧にアプローチができる強みがある一方で、個別療育時間が決まっているため一人の職員が担当できる人数が限られてしまう。	事業所の特色、プログラム内容により、担当者の代わりができない、しづらい状況が続いている。 担当者会議を実施し、代理の職員が療育に挑んでいるが、子どもが戸惑うかもしれないというリスクが懸念されている。	事業所の特色、プログラム内容により、担当者の変わりができない、しづらい状況が続いている。
2	職員は児童への療育提供のほかに、保護者対応、送迎、会社運営の他事業所とのミーティングも必要になるため、研修等を実施してもすぐにすべてのプログラムに参加・お願いすることが難しい。	責任、専門性が大きいプログラム内容のため、研修期間が長くなってしまふ。 発達センターなど近隣の研修には出向くことは可能だが、利用者の方がいる時間帯など難しい場合がある。	常にフォローに入ることができる職員を配置できる環境を検討する。また、児童、保護者対応が別々にできるよう、臨機応変なプログラム内容も検討しておく。
3			